

Title	周恩来
Author(s)	劉，亜洲；杉村，博文
Citation	大阪外国語大学論集. 8 p.85-p.103
Issue Date	1993-03-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79585
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

周 恩 来⁽¹⁾

劉 亜 洲 著
杉 村 博 文 訳

お父さん

お父さんが出発する前に起こったあのことをまだ覚えていますか。お父さんが大使となって遠くへ行くことになり、私たち姉妹がお父さんのために携行の荷物を準備しました。お父さんはあのレンガのように分厚いアルバムを必ず入れておくようにと念を押しました。当然よね、お父さん、アルバムの中にはお父さんの青春が一杯つまっているのですもの。

二人のお姉さんがアルバムを開いてみました。写真はとっても古かったけど、お父さんはとっても若かった。フランスの懷に抱かれて、多くの恐いもの知らずの中国の若者が天下国家を論じていました。⁽²⁾写真が一番多かったのは、お父さんとあの方——周恩來の伯父さん、お父さんたちの当時の、そして現在のリーダー。⁽³⁾

大姐（一番上の姉さん）がアルバムをめくりながら、突然二姐（二番目の姉さん）に聞きました。

「一つ質問ね、毛主席と周總理、どちらが美男子だと思う？」

私は心臓が高鳴りました。なんていう大姐、とんでもない質問だわ。しかし、私はこの質問があらがいのないものであること、とりわけ若い娘にとってあらがいのないものであることを認めないわけにはいきませんでした。リーダーである以外に、彼らも男ではないか。しかも、あんなに凛々しく美しい男たちではないか。何度も、私自身ぼんやりとこういう思いにとらわれたことがあります。

〈中国はどうしてこう二人の美男子に支配されてしまったのかしら？〉

でも、私はこれまでずっと深く考えてみようとはしませんでした。一枚の紙がその意識を隔てていましたが、その紙がいま大姐の指の一突きで破られてしまいました。

二姐は苦吟しながら答えました。

「周總理の方がハンサム」

この答に賛同すべきだと私は思いました。しかし、もし私が答えなければならないとしたら、もっと長い時間苦しんだことでしょう。この二人に点をつけることはとっても難しい。若いとき、二人はいずれ劣らず、唐伯虎でさえかすんでしまうくらい瀟洒でした。⁽⁴⁾いま一人は太ってしまいました。よくある無節操な太りかたではなく、いくつもの立派な形容、魁梧とか偉丈夫とかの形容をもらえる太りかたですけれど、やはりかつてほど魅力的ではなくなっていました。

しかし、大姐はこう言いました。

「周総理はきれいな顔で、毛主席は立派な顔だわ」

「どういうこと？」

「周総理は苦労性の顔をしている」

私はどきっとしました。

「私にはそうは見えない」二姐は言いました。「周総理はミスター中国だとみんなが言ってるわ」

お父さん、ちょうどそのとき、お父さんが入って来ました。お姉さんたちの会話がお父さんの耳に入り、お父さんは激怒しました。

「どいつもこいつもその減らず口を閉じろ！」

無理はありませんでした。この二人の名前ははるか高く天の上にあり、あくまでも神聖なものでした。それを私たちは普通の人間として論じたのです、不敬もいいところでした。

午後の間ずっと、お父さんの顔は曇ったままでした。夕食のとき、お父さんはそのことに触れませんでした。私たちはみんな押し黙っていました。お父さん一人で喋り、なんと曇り空を暴風雨にしていまいしました。ご飯茶碗がお父さんの手の中で激しく震えていました。お父さんはそれを力一杯床に叩きつけ、辺り一面にご飯粒の花が咲きました。

その晩、お父さんは出発しました。お父さんには申し訳ないと思いましたが、あの話の誘惑には勝てませんでした。口に出さないことはたやすい。しかし、思考の方はどうなるの？思考を封じ込める錠前など存在するのでしょうか？次の日、私はお父さんの書斎を掃除しました。机の上にあの方の写真がありました。私はあの方を見つめ、あの方も私を見つめていました。満点、私はひそかに声を上げました。絶対満点。その顔は完全無欠であるが故に躍動感に富み、また躍動感に富むが故に完全無欠でした。その顔を見つめることはまったく高級な楽しみと言えるものでした。私は目をそらすことができませんでした。その顔はどの角度から見ても幸いにあふれていました。苦労性なんてどうして言えるのかしら？

私はふと思いました。大姐はもって回った言い方で周総理の顔を賛美しているのではないのか。その顔の完全無欠さは極限に達し、そこから逆方向にターンした。良すぎることは悪いこと、幸せが過ぎれば苦しみが生まれる。美しい顔も醜い顔もいつかは消え去る、ちょうど皇帝と乞食が等しく消え去るように。しかし、乞食はあくまで乞食にすぎない。皇帝はあなたのお父さんよりももっとお父さん、だれよりも絶対的に偉い。醜い顔にしわがよるのをだれが惜しむだろう。でも、ハリウッドスターの顔がしわだらけになったら、そのショックや如何に、試してみる？人はやはりあまりに完全無欠はよくない。神は構わない。石のダヴィデとヴィーナスは衰えを知らない。この考えは私の心を疼かせました。大姐に話すと、大姐は冷たく一笑に付して、言いました。

「やめなさい。あなたは落第」

どうして、私は間違っているの？

お父さん、お父さんが行ってしまった次の年、中国は火山爆発を起こしました。⁽⁵⁾ 真っ赤なマグマがその触手を隅々にまで伸ばし、大は空と海、小は寝室のダブルベッドから街角の公衆便所まで、そのマグマに征服されないものはありませんでした。わずか数年の間に、革命の王朝交代は何度も演じられました。革命というものは疲れを知らないものなのです。革命は常に偉大でしたが、今度の革命はとりわけ偉大であり、その偉大さはロシアの十月革命を幼い弟に変えてしまいました。マルクスがもし生きて今度の革命を目撃したならば、『共産党宣言』はきっと書き改めなければならないでしょう。

あの方もあの連中と同じように軍服を身に纏いました。あの方の軍服姿は似合いません。特にあの道路清掃工のような軍帽を頭にのせると、秀麗洒脱な風貌が跡形もなく消え失せてしまいました。しかし、あれは軍服を纏う時代でした。七億の人口の内六億半が闘士であれば、だれが武装しないでいられるでしょうか。ましてや、雄師百万、あの方は最前列に立つ数人の戦士の内の一人だったのですから。⁽⁶⁾

軍服を纏ったあの方は見知らぬ人のように見えました。私は初めて気づきました、あの方はひどく痩せている。そうしてあの数年のうちに、あの方はほとんどなすすべもなく痩せてゆきました。最前列に立つ戦士の中に一群の男と女がいました。革命は彼らに榮譽を与え、また甘い汁を吸わせました。痩せは太り、デブは丸くなり、下を向いても出っ張った腹で爪先の見えない者も少なくありませんでした。あの方はしかし一枚の枯れ葉のようでした。

あの方はそれでも以前と同じようによく笑いました、しかしどういう訳か、その笑いはとても硬くひからびて、潤いに欠けていました。笑うと刀で刻みつけたような二筋の縦じわがほおに走る、そんな状況さえありました。賭けてもいいです、その笑いは苦いものでした。お父さん、お父さんのアルバムで私はあの方の笑い顔をよく知っています。数えきれないほどある毛主席が紅衛兵を接見する映画で、あの方が林彪に先を譲るシーンが何度も出てきます。あの方は笑みを浮かべて、あのかつては自分のものであった位置に林彪を押し出しました。あの方の笑いは苦いものでした、しかし、同時に人を戦慄させるものでした。

あの方の顔にはしばしば奇妙な表情が浮かびました。あれは何だったのか、私にはうまく言えません。ちょっと、脂身の多い肉を口にしたときにちょっと似ています。あるとき、テレビが大衆集会を中継しました。あの方が話し終わるや否や、江青のおばさんが突然腕を振り上げて叫びました。「総理を手本にしよう！総理に敬意を表そう！」一面シュプレヒコールの大合唱。あの方も即刻腕を振り上げました。「江青同志を手本にしよう！江青同志に敬意を表そう！」またも一面シュプレヒコールの大合唱。互いに学び合い、互いに敬意を表すのでしょうか、どうして殴り合いをするみたいなの？勝ち負けを争わないだけ良かったけど。

私が以上の観察を大姐に話すと、大姐は一言投げてよこしました。

「『可』をあげましょう」

お父さん、とりとめもなくこんなにたくさん書きました。もう嫌になりましたか。でも私はこ

れからやっと本題に入るところなのです。最初にお父さんに謝っておかなければならないことがあります。私はあまりにも長い間お父さんに隠していました。しかしそれも仕方がなかったのです、軍令重きこと山の如しだから。(7)お父さん、思いもよらないことでしょうけれど、この二年間、私はずっとあの方の側にいたのです。

二年前、一九七四年、革命は中年にさしかかりました。(8)革命は途方もなく肥え太り、あの方は見る影もなく痩せ衰えました。革命はあの方の血を一滴残らず吸い尽くしてしまったのです。そのとき、今度は癌が面白半分に割り込んできました。崩壊、しかも全面的な崩壊。壁一つ隔てて死神が控えていました。あの方は三〇五病院に入院を余儀なくされ、病院側は専門の医療チームを組織しました。(9)そして私はそのメンバーになったのです。

あの方を病院に迎える日、私も迎えに行きました。あの方の傍らに歩み寄ったあのときから、いいえ、医療チームに加わったあのときから、私は極めて強い悲劇的な雰囲気を感じました。チームの人たちはあの方の病状を検討するとき、細心の注意を払って不吉で恐ろしいあれらの字句を避け、表情は花瓶を割ってしまった女の子そのままでした。二言三言口にしただけで、目に涙があふれることも珍しくありませんでした。

私たちはあの方の手助けをして荷物を整理しました。私はあの方の後ろについて、あの方の執務室——中南海西花庁——を出ました。(10)ドアの所まで来て、あの方は立ち止まり、振り返りました。あの方は前世紀にできたこの小部屋を長い間眺めていました。眼差しは柔和でした。あの方はその眼差しで部屋の中のすべてを愛撫していたのです。私はあの方の秘書が私たちのチームに囁くのを耳にしました。

「昨夜、総理はここを離れるに忍びないと何度も繰り返していた。この執務室、総理は二十五年も使っているんだ」

一九四九年、あの方はここにやってきました。家屋もの言わずとも、共に在りて二十五年、情自ずから奥深き所に存す、です。そしてあの方の今このときの心中は極めて明らかでした。

〈今ここを離れば、もう二度とここに帰って来ることはないのだ〉

私はうつむき、あの方を見る勇気がありませんでした。

入院するや、あの方は猛烈に仕事をこなしていられました。(11)もし全国民がこぞってあの方のように働けば、共産主義の実現がどれだけか早まることでしょう。入院して三日目、政治局の会議が懷仁堂で開かれ、(12)毛主席も出席されることになりました。会議は午後三時からに決まりましたが、あの方は一時半にはもう出かけて行きました。

係の者たちが会場をしつらえているところでした。あの方はそれを目指してやってきたのです。あの方は母親のような辛抱強さで温度、光線、音響などを見て回り、最後に尋ねました。

「主席の席はどこかね」

「あっちです」

係員が一つの椅子を指さしました。その椅子は他の椅子とはまったく別格でした。あの方は椅

子に歩み寄り、坐り、立ち上がり、また坐り、また立ち上がりました。

十分だ、私は心の中で叫び声を上げました、もう十分だ。あなたの心からの気遣いはだれにも分かります。ただ、あなたは私たちにこれからどのような人間になれというのですか。頭をかち割ったところで、私たちにはあなたのすぐれた品性の一万分の一も身につけることはできません。毛主席の坐る椅子は、あなたは一つ残らず前もって坐ってみました。快適さが十分ではないことを心配したのですか、それとも階級の敵が破壊工作で爆弾でもしかけていないかと恐れたのですか。

牛。一つの思いが突然脳裡に浮かび上がってきました。細心かくの如し、善良かくの如し、この称号しかあの方にふさわしいものはないでしょう。⁽¹³⁾

しかし、たちまち私は胸の内が痛みました。牛の命は余りに辛い、生涯抑圧されて最下層にありながら、それでなお草をはむ資格しかない。

大姐に会ったとき、私は私の考えを話し、最後に言いました。

「どうも姉さんの言ったことが正しかったみたい。あの方は生涯苦労性の運命なのだわ」

大姐は言いました。

「『良』をあげるには、あと一点足りないわね」

大姐のこのことばが理解できたのは、かなり後になってからのことです。

お父さん、革命は熱湯の風呂につかっていた。魂は煮えたぎった油鍋の中に突入し、また打ち出てきました。全国が一つの大芝居——チャイナ版ギリシャ神話——になっていました。ギリシャ神話は目の眩むほど美しいばか話です。ばかげているからこそ美しい、ばかげていればいいほど美しい。役者はみんな裸です。

あの方と同じベンチには坐りたくないと言っている人がいると、以前から噂には聞いていましたが、信じられませんでした。あの方は人に対しては羊のように善良で、己を律することは理解しがたいほどに厳格でした。顔が美しすぎたとは言え、攻撃性はそなえていませんでした。あの方と手を握らないで、だれと手を握ることができるでしょう。あの方の側に来て始めて、すべてが真実であることを知りました。

あの日、あの方は病院でタイの首相ククリットと会見しました。⁽¹⁴⁾私は傍らにいました。会見が終わりに近づいたとき、二人の話は戦争と平和に及び、あの方は言いました。

「ククリット首相、お国に帰られたらすべての人、特にご子息とお孫さんにお伝え下さい、中国がタイを侵略することは永遠にありません」

ククリット首相はポケットから長い長方形の紙を一枚取り出し、あの方の前に差し出しました。

「あなたの手であなたの約束を書いて下さい」ククリット首相は言った。「私はそれを持ち帰って九百万枚コピーし、息子や孫たち、およびタイ国民すべての首に掛けたいと思います。これは私の生涯で最も貴重な財産となるでしょう」

私は大いに感動させられました。あの方が一筆振るえば、この世に素晴らしいエピソードが一

つ増えるのです。

あの方はじっと坐ったままククリットを見つめていました。眼差しは深く、考えを押し量ることとはできませんでした。長い沈黙の後、あの方はようやく口を開きました。

「私は手の震えがひどく、書けません」続けて一言付け加えました。「私の病は大変に重いのです」

私はどれだけ失望したことでしょう。あなたは書こうとしなかった、しかしあなたには書けたのです。あなたは伝説を一つ葬り去ってしまった。私はあなたを見つめていました。あなたの眼差しはどこかおかしかった。突然、私は震えました。私はあなたの目の中に——何だと思いますか——憂慮を、とらえたのです。それは実に悪いタイミングでやってきました。あの憂慮はあなたの先ほどの大いなる言葉を粉飾するためのものだったのですか。もしそうだとしたら、あなたはだれに聞かれることを恐れているのですか、だれに読まれることを恐れているのですか。あなたが、七億の好漢の総理が、軽く一度足を踏みならせば、泰山でさえも縮み上がります。このお天道様の下であなたはだれを恐れるのですか。

彼らは別れの挨拶を交わしました。ククリット首相が言いました。

「最後に一つお聞きしてもよろしいかな」

「どうぞ」

ククリットは笑みを浮かべてあの方を注視していました。正確には、あの方の胸を注視していました。

「この度、貴国を訪れ」ククリットは言いました。「私は一つの小さな変化を発見しました。人々はほとんどもう毛主席のバッジを着けていませんね」

私は即座に視線を私の患者の胸に投げかけました。そのときその場に居合わせた人はみんなそうしたと私は信じています。そこでは、一つの圧縮された太陽が光芒を放っていました。⁽¹⁵⁾ 私たちはかつて例外なくこの小さな太陽の輝きに浴しました。

「一九七一年に私が北京に来たとき」ククリットは言いました。「みんな毛主席のバッジを着けていました」

「それがあなたの質問ですか」

「いいえ」ククリットの笑い顔は少し謎めいていました。

「質問は閣下あなたに関するものです。文化革命が始まったとき、人々はみな毛主席のバッジを胸に着けました、ところがあなたは『人民のために尽くせ』というバッジしか着けなかった。一九七一年、革命が最も激しく燃え盛ったときでさえあなたはそうでした。⁽¹⁶⁾ しかしいま、人々がみんな毛主席のバッジをはずしているのに、なぜあなたはまだ着けているのですか。あなたはまたなぜ『人民のために尽くせ』というバッジを毛主席のバッジに換えたのですか」

ことばは親しみやすく柔らかくて、綿のようでした——綿の中には一つかみの針が。しかし、観察眼は一流でした。

あの方は顔から一切の表情を消し去り、言いました。

「ククリット先生は中国のバッジにたいそう興味がおありのようです。私のこのバッジを御所望とお見受けいたしました、プレゼント致しましょう」

あの方は逃げました。

しかし、私には逃げるすべがありません。ククリットは残酷に何かを引き裂いたのです。小さなバッジとは言え、その背後には無数の有為転変が隠されているのです。中国において、あの方は最初に毛主席バッジを胸に着けた人ではありません、しかし毛主席バッジを最後まで着けていた一人であることは確かです。私は大姐を完全に理解できたと思いました。

果して、今回私が私の観察を話し終わると、大姐は言いました。

「『優』。続けて頑張りなさい」

一九七六年がドアの向こうに控えていました。あの方は極度に衰弱し、一寸刻みに死に近づいていました。新しい日めくりをあの方の部屋に掛けたとき、思わず悲しみがこみ上げました。最後までめくれないことはもう言うまでもありません。しかし一体何枚めくれるのでしょうか。革命のドラや太鼓は更に慌ただしく、すでにリズムを失っていました。あの方の仇敵たちは生氣潑刺として、ゴール目指してラストスパートの気配を発散させていました。人の舌は毒をもつものですが、新聞にも毒がありました。孔家の次男に矛先を向けた一篇の文章は、「その書生の腕は負傷したことがあります、毎日胸の前に吊るしていた」と無理やりこじつけ、作者の口ぶりはまるで見てきたことのようにでした。⁽¹⁷⁾大晦日の夜、一人の老人があの方を見舞い、言いました。⁽¹⁸⁾

「ラジオの放送に気をつけることだ」

私はそれをドアの外で聞きました。

その夜、定期治療のとき、ラジオ放送が始まりました。詩歌でした。詩歌は七首である、これは魯迅の言葉です。アナウンサーの声は刑場における烈士の演説を思い起こさせました。

鯤鵬翼を広げ飛翔するや九万里

竜巻に羽ばたきて、旋回し天を昇る

腰を抜かすは蓬間の燕雀

ジャガイモが煮えた

おまけに牛肉もある

たわごとはよせ

天と地の覆るを見よ⁽¹⁹⁾

一人がたわごとを言わないと、別の一人がこの世界の大変革を求めることになる？私には詩の言わんとすることが理解できませんでした。湯気を立てる殺気を感じることはできました。ドアの外には記者たちが待ち受けています、私たちの口から様子を探り出そうというのです。真綿は鋼の刀より勇もあれば謀もある。私の気分は最悪でした。

私は放送が始まってからずっとあの方のほうを見る勇気がありませんでした。私は見せ物にさ

れたばかりの雄ライオンを想い描いていました。こっそり一目見て、私はびっくりしました。あの方は笑っていたのです。もう一度よく見ると、その笑いは本物で、とても暖かく、春の笑いでした。

私が病室を離れると、記者たちが突進してきました。

「ラジオを聞き終わって、総理の反応はどうだった」

「総理は笑っていたわ」

夜半、病室で物音がするので、こっそり入って行きました。室内に明かりは点いていませんでしたが、とても明るかった。お月様が窓に昇っていたのです。私はあの方のベッドの側に歩み寄りました。あの方はベッドにもたれて坐り、目はきらきらと輝いていました。突然、だれかが私の心臓をナイフでえぐりました。私はあの方のほおに二筋の涙をはっきりと見たのです。

私は狼狽し、逃げ出そうと思いましたが、足が動きませんでした。あの方が泣いている。太陽は休息した。あの方は涙を暗い夜にとっておいたのです。それはまごうことなき男の涙でした。私は尋ねました。

「どうされたのですか」

静かすぎました、いくつもの危険が潜んでいるようでした。少し間をおいて、あの方はゆっくりと言いました。

「私は年をとってしまった」

一言で、私の涙はあふれました。私はあの方をじっと見つめました。月は恐いほどに明るく、電灯が化けたもののようでした。あの方はまったく見る影もなく老いさらばえていました。髪の毛は中途半端に白く、弱い色調を呈していました。あっさりと思いきり白く、雪を頂くといった感じではありません。皮膚は揉みくちにされた紙のようで、髭も伸びていましたが、不揃いで、精彩なくしょぼくって見えました。昔のあの方の人の心胆を寒からしめた黒髭はどこへ行ったのでしょうか。⁽²⁰⁾髭の盛衰はすなわち男の盛衰。私はかつて毛主席になぜ髭がないのかと不思議に思ったことがあります。

突然あの方は激しく咳き込みました。私は言いました。

「横になって下さい」

あの方は頭を横に振りました。

「手を貸して体をもう少し起こしてくれんか。私は横になりたくない、本当に横になりたくないんだ」

私はあの方が坐りなおすのを手伝い、ベッドの傍らのソファに坐りました。今度はあの方を見上げることになりました。あの方の背は高くなく、人に仰ぎ見られる機会は多くはありませんでした。⁽²¹⁾毛主席に比べればずっと少なかった。しかし、この角度からあの方を見ると、あの方も大いに人を威圧するものを備えているのです。

あの方の首はあまりに細く、その屈強な頭を支えることはほとんど不可能に見えました。何度

も、私はその頭が一方にかしいでしまいはしないかと思いましたが、そうはならず、そのために頭は更に強靱不屈に映りました。見つめているうちに、ふと奇妙な発想が浮かびました。私は円明園に、あの一面の偉大な古代の廃墟に思い至ったのです。⁽²²⁾円明園は確かに手足をものがれ廃人になりました。しかし円明園は耐え抜いて倒れず、不屈の頭をずっともたげ続けてきました。

私は大姐に会うと、また上のようなことを話しました。大姐は言いました。

「笑うときは世界中があなたと共に笑い、泣くときはあなた一人が泣く」

「それじゃ」私は言いました。

「少なくとも一人はあの方と一緒に泣きます。それは私です」

大姐は私を見つめたまま、随分長い沈黙の後で言いました。

「一つ話を聞かせてあげましょう。一組のフランス人の兄弟が食事をする事になり、食卓の上には大小二切れのビフテキがありました。兄はすぐさま大きい方を自分の皿に取りました。弟が言いました。『兄さんは全く礼儀知らずだ、大きい方を取るなんて』兄が尋ねました。『もしお前だったらどっちを取る？』弟は言いました。『もちろん小さい方だよ』兄は笑いました。『お前は小さい方をすでに取っているじゃないか、まだ何か文句があるのかい？』」

お父さん、ここで断固筆を擱きます。

小 欣

一九七六年一月二日

小 欣

訃報はお前の手紙より二時間早く届いた。彼は逝ってしまった。

私はお前の手紙を引き裂いた。お前の手紙は私の心を引き裂いた。彼は逝ってしまった。なんとこんなふうに逝ってしまった。

彼が逝ってしまい、誰が残った。私、お前。一つの国、半分の家庭。一度の革命、幾つかの路線。私は突然後に残った全てが下らんものに思えてきた。本当に下らん。私を含めて、しかし私だけじゃない。私の事はよい、信じられないなら、お前……お前、我が大使館のゲストハウスに行って、あの覇気も性根もないサッカーチームを見てみるがよい。国内で優勝したサッカーチームがこちらにやって来て、試合を失い、面子もとことん失った。彼は昨日死んだのだ。ところが、その昨日、何人かの選手がスーパーマーケットをぶらつき、商品は山のように積まれているが、売り子が居ないのを見て、品物を幾つかポケットにねじ込んだ。挙げ句がものの見事に防犯カメラに撮られてしまい、つい先程パトカーが彼等を大使館まで送って来た。護送の道中サイレンが鳴り響き、針の筵とはまったくあの事だ。

彼は逝ってしまった。それも良いだろう。こういう下らん出頭命令のために白髪を増やす事も

なくなる。

あー、こんな事を書いて何になろう。

テレビをつければ全て彼の事だ。彼は紛れもなく世界に属するのだ。受像機の中の可愛い女性アナウンサーはこれまで見た事もない厳肅な顔つきだ。去年この国の大統領が死んだ時でさえこんなふうではなかった。訃告も適当に読み流していた。こいつらの大統領は何様だというのか。役者だろうが、歌手だろうが、レストランの給仕だろうが、興さえ湧けば誰だってやれる。おまけに走馬灯のようにくるくる替わる。俺達にはしかした一人だけなのだ。

引き続き、テレビはレギュラー番組を変更し、中国特集を組んだが、馬鹿ばかしいにも程がある。初っぱなから人を小馬鹿にしている。ファッションモデルの撮影しながら、故宮の皇帝の宝座が様々な角度から映し出される。それは坐る人がいなくなってまだわずか半世紀ちょっとに過ぎない。

ナレーション：中国の皇帝はいつも五更、すなわち明け方の四時半に朝廷に出る。表面上は早起勤勉を意味しているが、実際には黎明時のあの暗い神秘的雰囲気を利用し、百官群臣に彼がはっきり見えないように図っているのである。なぜなら、彼はちびであるかも知れないし、一重瞼であるかも知れないからである。空がすっかり明るくなった時、皇帝はもう朝廷から姿を消している。皇帝の姿をはっきりと見たければ、常にその死を待つしかない……。

これのどこが中国特集なのか、一刀の下に切り捨ててやりたい。

小欣、私の心は乱れここに極まれりだ。

(大きな塗りつぶし。筆を擱く。翌日また続けて書く)

新華社がファクスで彼の遺影を送ってきた。私は殆ど自分の目が信じられなかった。なんと凛々しく才気に満ちた偉丈夫である事よ。力を十分に蓄え、胸をはり、僅かに左前方を見つめている。まさに五斗の米のために腰は折らぬ気概である。(23)彼はいつこの写真を撮ったのか。まさか彼はこの写真が遺影になる事を知っており、全力を尽くしてかくも氣力に満ち溢れた写真を撮った訳でもあるまいに。彼のこのポーズは、私はパリ時代からよく知っている。しかし御無沙汰していた。当時、写真を撮る時、彼はよくこのポーズに構え、おまけに私に尋ねたものだ。

「どうだ、不朽の雄姿とは思わないか」

この質問は実際もう十分不朽だ！

私は彼の遺影を凝視した。この顔は長所が多すぎる。最初に彼に会った時のあの下らん思いがまたもや否応もなく頭をもたげてきた。

〈彼は中国人らしくない〉

彼の顔は地中海一带の人々にちょっと似ている。力強い輪郭、アクセントのあるライン、荒々しく一方に振り分けた黒い髪。傑作。彫刻家から喝采を博す。彼は誰よりもその事を知っていた。

セーヌ河畔で、我々男子学生は群れを成し、学校のどの娘が一番の美人であるかを論じ終え、男では誰が一番かも論じようとしていた。

「一番はここに坐っているぞ」

なんと若い言葉である事か。そして、かれは楽々と一番をせしめてしまった、勿論容貌に一番も二番もないのだが。

当時、私達はみんな若かったのだ。次の日、私はわざと言ってやった。

「ただちょっと痩せてはいるがね」

「それは革命をやっているからだ」彼は真顔になって言い、少し間を置いて付け加えた。

「我が身痩せたりと雖ども、天下必ずや肥えん」

いま、天下は豚のように肥え太ったが、彼は逝ってしまった。

彼はあまりに慌ただしく逝ってしまった。私と彼はかつて一緒に死のうと誓いあった。彼はどうして私を待ってくれなかったのか。彼は忘れてしまったのか。いや、私も忘れていた、三十年近く忘れていた。しかし、いま私はまた思い出した。待ってくれ、絶対待ってくれ、今すぐ車のキーを取って来るから。

通りは自動車の洪水である。万丈の紅塵がひそかに蠢いている。前進前進、歴史を突き崩せ、時間を切り裂け。時間は切り裂かれ、痛い痛いと呼び声を上げながら、もと来た道を引き返していった。四十年前に戻った。

凱旋門の下で、私達二人は散歩をしていた。一台のシトロエンが突然癲癇を起こし、ギャーと唸り声を上げて歩道に乗り上げて来た。彼は目ざとく敏捷に、さっと私を横に引き寄せた。私の動悸が収まらない内に、彼は笑って言った。

「一台の自動車が二人の天才めがけて突っかって来て、もう少しで俺達を轢き殺すところだった」

「俺は天才ではない」私は言った。

「しかし、もしお前のような天才と一緒に死ぬるなら、俺は最高に光栄だ」

「それでは将来一緒に死のうじゃないか」

彼は大笑して、私の手を取り、揺すった。突然、目の色がまた厳肅なものに変わった。

「分かったか、将来だぞ、俺達は長生きするんだ」

「どれくらい？」

「八十でやっと合格だ！」

「八十？長すぎるな」私は頭を横に振った。

「みんながお前は死ぬのが恐いのだと言うぞ」

「ノン！この世界で、俺が最も恐くないのが死ぬ事だ。ちょっと長く寝るだけの事じゃないか。本当は、俺達はもともと寝ていたのだ、それを俺達の母親が呼び起こし、しばらく側にいるように言ったんだ。生まれる時は一声『やって来たよ！』、死ぬ時は一声『行ってくるよ！』。実際

何も大した事はない」

豪放！これを聞いて震撼しない者があろうか。当時私は、彼は話をしているのではなく、惜しみもなく青春をまき散らしているのだと思ったものだ。今、青春とはおさらばした。彼は合格しなかった。革命の最後の一刹那に彼は豪放に生きたかどうか、私は考えた。もし大いなる「豪放」がなければ、ささやかな「豪放」はどうだ？

夜が更けた。私はよろめきつつオフィスから寝室に帰った。大使館はすでに悲しみの世界に変わっており、どの片隅にも泣き声が隠れていた。彼等は涙で彼の旅立ちを見送っているのだ。私も彼を見送ってやらなければならない、ただ涙ではなく、酒でだが。

私は四本の茅台を彼の遺影の前に置き、全部口を開けた。⁽²⁴⁾彼が笑っている。きっと酒の匂いを嗅ぎつけたのだ。私がなぜ茅台を用意したのか、またなぜ四本一緒に供えたのか、分かるのは彼だけだ。彼は酒が心底好きなのだ。待て、待て、私に反論するのはやめろ。彼が後になってあまり飲まなくなったのは知っている、しかし彼は深く深く酒を愛していた。私は酒を注ぎ、彼に言った。

「また遵義にやって来た事にしようや」

遵義、遵義。あの不滅である事を運命づけられた都市。そこで彼はある会議を主宰し、「舵手兼導師」毛主席がその会議で才能をきらめかせ姿を現したのである。⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾その時からこの天下に人材輩出の革命はもはや押しとどめようのないものとなり、「人民は今この時より立ち上がった」まで突き進んだのだった。⁽²⁷⁾

あれも深夜であった。遵義郊外の茅台を産する所で、私達は酒を飲んだ。私は四本調達してきたが、茶碗は一つしかなく、二人で使うしかなかった。茅台は相手にするとやばい、二杯でもう私は尻尾を巻いて逃げ出さなければならなかった。私は言った。

「強すぎる」

「俺は好きだ！」彼は言った。

彼は一杯また一杯と飲み続けた。十二杯飲んで、彼の顔が赤くなった。私は言った。

「その辺でやめとけよ」

彼はまじまじと私を見つめた。一瞬の内に、私は彼の両の目が本当に李白のそれのように思えた。彼は一口でまた一杯飲み干し、言った。

「知っているか、茅台はきつく、純度も高い。もし誰かが茅台を飲みすぎたりして、飯の後でタバコに火でも点けようものなら、たちまち爆発してしまうのだ！」

彼は突然語気を強め、私を驚かせた。言った言葉に間違いのない事を証明するためである事は明らかであった。彼はマッチを一本擦り、続いて茶碗に酒を注ぎ、マッチを茶碗に突っ込んだ。ボンと音がして、一塊の炎が突然跳ね上がった。瞬時に酒は燃え尽き、彼の若い顔が炎の中できらきらと輝いていた。

彼はまた続けて飲んだ。私は黙って彼の代わりに数えていた。四本の茅台が残らず空っぽになっ

た。なんていう奴だ、彼は全部で二十五杯飲んだ。もしまだ有れば彼はまだ飲めたと私は固く信じている。底無し。他に形容なし。李白もせいぜいこの程度のものであっただろう。どうだ、彼はなんと微塵も酔ったふうはなく、意気ますます盛んである。

突然シュッと音がして、彼はまたマッチに火を点けた。私がびっくりすると、彼は呵呵大笑し、木の上で眠っていた鳥たちが驚いて飛び立った。

往時は昨日の如く、此の身すでにこれ人と天と相隔つ。私は一杯注いでは一杯振りまき、二十五杯全て風に任せて彼に届けた。最後の一杯、私はそれに火を点けた。火は激しく燃え、また瞬時に燃え尽きた。私は火の痕跡さえも留めないグラスを見つめ、涙はもはや押しとどめようがなかった……

(以下は涙で滲み、文字が判然としない)

朝、大使館の屋根の国旗がゆっくりと下りて来た、しかしわずか一時間の後、また這い上がっていった。北京からの緊急指令：半旗を掲げない、追悼会を開かない、弔電を受け取らない。みんなの泣き声は更に悲しく、更に大きくなった。意志を汚され犯されたのだ。大使館の前は他人様の議事堂と財務省だ。その広大な建築群の旗がバタバタとボールの半分まで降りた。それに比べ、我々の高く翻る旗のなんとけち臭く、滑稽である事よ。

弔問に訪れる人は軍団の如く防ぎようがなかった。左派中間右派がここで真の大連合を実現した。当地に移民として居住している国民党の一退役将軍もやって来た。しかし彼は決して自分の身分を忘れてはいず、帰り際にこう言った。

「もし我々が内戦時に周恩来を我々の側に引き込む事ができたなら、いま放逐されて台湾にいるのが毛で、我々が北京にいたかも知れん」

北京よりまたも指令：大使館の業務を停止する、広報ウインドーに遺影を掲げてはならない。どうあってもきれいさっぱりと抹殺しようというのだ。

〈国で裏切り者が出たのか？〉

館員の中からこういう声も聞こえてきた。

我が国に対し極めて友好的で、生涯中国共産党史を研究する事で飯を喰っている一人の大学教授が、断固として大使館に入り弔問する事を要求し、我々に一通の手紙を渡した。その手紙は頭からこう始まっていた。

「裏切り者達は……」

本当に裏切り者が出たのだろうか。我々の傍らにはソ連の禿野郎が寝ているとしょっちゅう言っていたではないか。⁽²⁸⁾そいつが目を覚ましたとでも言うのか。それだとまだ事は簡単だ、戦うまでじゃないか。八億の人口だ、戦わないでどうする。革命の刃はもう二十年以上も血を吸っていない、血に飢えている。一つ研いで、先ず裏切り者達から試し斬りをしてみよう。これは彼が

言った言葉だ。

一九二七年、我々が上海で大きく蹶いた後、裏切り者達は喜び勇んだ。⁽²⁹⁾私はかつて彼と一緒に裏切り者を始末した事がある。相前後して八名の重要な同志を敵に売った裏切り者がいたが、ついに我々によって捕らえられた。八つの命、池をも満たす鮮血。しかし我々はそいつに一発の銃弾をくれてやっただけだ。私は死体の処理について彼に指示を仰いだ。彼はどなった。

「穴を掘って埋めてしまえ！穴は八メートルの深さに掘れ、八メートルだ！」

私はいま心底誰かのためにもう一度八メートルの深さの穴を掘ってやりたいと思う。私は大学教授に会う事にした。

彼は口を開くや言った。

「中国は掌ほどの大きさもないのか、周恩来一人受け容れる事ができないとは！」

彼は私のオフィスに腰をおろすや堂々と弁じた。よく聞いてみると、彼は私に向かって中国共産党史の講義をしているのだ。小欣、中国は一つの芝居だと書いていたね。私達は演じる側で、彼は観る側だ。私達の一挙手一投足、彼は実によく観ている。彼はミカンの皮を剥いている。中国というミカンの皮を剥いている。実に手慣れたものだ。彼の言葉は阿片だ、毒のあるのは分かっている。しかし聞いていると実に心地よく、体中の骨がカタコト音を立てて鳴り出しそう。ただ一言、私の考えと噛み合わず、私を不快にさせた言葉があった。彼は言った。

「彼は終始一貫忠実に仕えた。歴史上、王明路線とか張国燾路線とかはありえるし、⁽³⁰⁾場合によってはなにになに路線というのもあるって構わない。しかし、周恩来路線というものは絶対にありえない」

〈それはなぜだ？あまりに不公平ではないか？彼ももとは天の寵児だったのだぞ〉

私はそう思った。大学教授は大いに論じ立てた後、帰っていった。演説で全精力を使い果たしたかのようであった。彼は頭を垂れ、歩みはのろかった。私達は彼を見送った。大使館の入口まで来て、彼は振り返った。彼の目は赤く充血し、極めて沈痛な口調で言った。

「彼には……子供一人いない……」⁽³¹⁾

私は心臓がギュッと締めつけられ、慌てて横を向いた。

(以下またしても塗りつぶし、結末なし)

(『解放軍文芸』1988年第8期)

訳 注

- (1) 原題は『恩来』で、“《龍的年》非小説系列之一”(『龍的年』非小説シリーズの一)という副題が付いている。“龍”は「辰年」と「中国・中国人」とをかけたものであろう。“非小説”の学問的な定義はまだなされていない。本訳は『作家、評論家、編輯家推薦 1988年全国短編小説佳作集』(上海文藝出版社、1989)収録の作品に基づいて翻訳した。

劉亞洲(1953-)、一九六八年中国人民解放軍入隊、一九七五年武漢大学外文系卒業、七〇年代後半より作家活動を開始する。歴史小説にも長じ、当代中国作家の中で最も注目すべき一人と言ってもよい。文化大革命さなかの軍入隊、大学推薦入学などから考えて、高い地位にある軍関係者の家に生まれた可能性が高い。中国共産党最古参幹部の一人で、文化大革命後、党中央副主席、国家主席、政治協商会議主席などを歴任した李先念氏(1905-1992)の女婿である。

- (2) 一九二〇年「十一月七日、周恩来ら一九七名の中国人学生がフランス船ボルドー号でマルセイユにむかったが、それは中国フランス教育会の組織した第十五群のフランス『勤工儉学生』たちであった」(矢吹晋『毛沢東と周恩来』)

「『勤工儉学』は、経済的にさほど恵まれない青年男女が、フランスで働きながら学ぶ制度である。第一次世界大戦後のフランスをはじめヨーロッパの労働力の不足を補うとともに、外国の新知識を吸収し、国家建設に有用な人材を養成する趣旨で、一九二二年四月に『フランス留学勤工儉学会』が設けられた。

(中略) この勤工儉学の制度を利用した中国人青年は一〇万とも二〇万ともいわれるほど、相当の人数にのぼっている。そしてこのなかから後日、周恩来はじめ近代中国の指導者となった者は数知れない」(寒山碧著『鄧小平伝』)

「勤工儉学」は“勤於工作儉以求學”(仕事に励み儉約して学ぶ)の八文字をつづめたもの、「フランス留学勤工儉学会」は中国語では“留法勤工儉學會”という。

- (3) 周恩来(1898-1976)の詳しい歴史は矢吹晋『毛沢東と周恩来』他に譲るが、本訳に関係するところで言えば、周恩来は一九一七年から一九一九年の間、日本に留学、「五・四運動」に際して天津で活躍した後、一九二〇年から一九二四年の間、フランス、ドイツに留学し、一九二二年中国共産党に入党、中国共産主義青年団旅欧総支部書記を務め、中国共産党旅欧総支部で活動した。以後、一九四九年の人民共和国内政を折り返し点とし、逝去の瞬間(一九七六年一月八日午前九時五七分)まで、幾多の紆余曲折を経ながらも、常に中国共産党の指導者であり続けた。

ここで周恩来と毛沢東(1893-1976)との関係について言えば、周恩来は毛沢東の天才に賭けた、或いは惚れたのだと言えよう。周恩来は彼我の才の違いをはっきりと認識することができたのである。周恩来は毛沢東に対して名伯楽であったばかりでなく、自らに対しても名伯楽であった。「抗日戦争」とそれに続く「解放戦争」において、毛沢東の党は実に鮮やかに勝利したが、その鮮やかさは驕りとなって、人民共和国内政後の数々の失政と悲劇を生んだ。周恩来の目も曇らされていた。毛沢東の党は「党が全てを指導する」という「人治」体制の明暗両側面を見事に演じて見せたのである。

- (4) 唐伯虎、明代の画家であり、詩人である唐寅(1470-1523)を指す。“伯虎”は唐寅の字、“寅”すなわち“虎”である。唐寅の生き方は奔放不羈で、絵を売って生業とし、“江南第一風流才子”という印を用いた。
- (5) 一九六六年の「文革」(“無産階級文化大革命”)の勃発を言っている。
- (6) 毛沢東の七律〈人民解放軍占領南京〉(一九四九年四月)に、“鍾山風雨起蒼黃、百万雄師過大江”(「鍾山の風雨蒼黄として起き、百万の雄師大江を過ぐ」)という一句がある。“鍾山”は南京、“百万雄師”は人民解放軍、“大江”は長江(揚子江)を指す。“起蒼黄”の解釈には異説がある。本文中の“雄師百万”は、文革中「毛沢東・無産階級司令部」を“保衛”する意思表示として、軍服軍帽(紅衛兵ファッション)に身を包んだ者たちを指す。
- (7) 「私」は軍系統の病院に勤務する医療関係者という設定である。
- (8) このとき中国共産党内は「林彪事件」の後遺症を引きずりながら、文革派と反文革派が毛沢東と周恩来の影響の下で微妙なバランスを保ち共存していたが、「林彪事件」を文革終結の好機と捉え各部署で積極的に整頓を押し進める周恩来と、江青を中心とする文革派との矛盾は日増しに深まっていた。(「林彪事件」注16参照)
- (9) 「三〇五病院」(原文“三〇五医院”)のようにナンバーで呼ばれる病院は一般に解放軍系統の病院である。高文謙《在最後の日裏》によれば、周恩来は七二年五月の定期検診でガンが発見されたが、政治情勢が入院加療を許さず、仕事ができなくなるまで病状が悪化した七四年六月一日、やむなく手術のため入

- 院したのであったが、その入院中も江青一派のさまざまな妨害に遭い、十分な治療を受けることができなかった。入院当日に一回目の手術を行い、その後、逝去までに数回の手術を繰り返している。そして七五年九月二十日の手術を境に、周恩来は二度とベッドを下りることはなかった。
- (10) 「毛沢東も劉少奇も、中南海と呼ばれる一廓に住んでいた。中南海は紫禁城（いまの故宮）の西側にあって、北海、中海、南海と南北に続く広大な三つの池のうち、中海と南海をかこむ。紫禁城のつづきとして、美しい楼閣がつらなり、清朝のころは、民衆は立ち入り禁止であった。中華民国時代には一般に開放されたことがあるが、現在は毛沢東のかつての住居のみ、中国人にかぎり見学ができるという。
- 中華人民共和国が成立してからは、毛沢東、周恩来、劉少奇、朱徳らがここに住居をおいた。党の本部（すなわち中央委員会）、内閣（すなわち國務院）もここにある」（竹内実『毛沢東』）
- 小説原文では周恩来の執務室が“中南海西華庁”となっているが、“中南海西花庁”が正しい。
- (11) このとき周恩来は建国二十五周年記念行事（七四年十月開催）の準備を取り仕切っていたが、次期全国人民代表大会（七五年一月開催）を控え、江青一派との間で党、政、軍のポスト争奪戦が白熱化していた。
- 「六月に最初の手術を受けた周は、従来の温厚姿勢を一転し、毛沢東はじめ宮廷派に正面から対決するようになった。余命いくばくもないことを悟った周は、生あるうちに毛や宮廷派の極左的な路線と一戦を構え、社会主義国家の建設を軌道に乗せる決心をしたのである。」（寒山碧著『鄧小平伝』）「宮廷派」に関しては注17参照。
- (12) 懷仁堂、中南海にある建物。外国の賓客との高級レベル会談などにもよく使用される。
- (13) 「いまの中国では、掛軸や額はもとより、筆筒や墨のたぐいまで、魯迅の詩句がよく使われています。その中で最も多いのは、
- 横眉冷對千夫指 眉を横たえて冷やかに對す 千夫の指
俯首甘爲孺子牛 首を俯れて甘んじて爲る 孺子の牛
- という一對の句でしょう。（中略）孺子とは小さな子供のことです。日本では子供を背中のにのせて、四つん這いになってまわることを『お馬』といいます。ところが変わって中国では『お牛』というのです。孺子の牛とは、子供のためにお牛になることを意味します。（中略）『千夫』は攻撃してくる敵をさし、『孺子』は人民大衆をさすのです。敵には毅然として対し、人民にはやさしく奉仕すべきことを述べています」（陳舜臣『中国詩人伝』、講談社、1988）
- (14) 「75年3月に登場したククリット内閣により積極的な対中接近が進められ、同年7月ククリット首相が訪中し、国交正常化が実現した」（外務省アジア局南東アジア第一課編『世界各国便覧叢書〔アジア編〕タイ王国』、日本国際問題研究所、1983）
- 中・タイの国交正常化は七五年七月一日であるが、ククリット・ブラモイ首相の訪中には、ヴェトナム戦争の終結によってもたらされたインドシナ三国の共産化と、それに対するタイの懸念という背景がある。このとき周恩来は文革派の攻撃にさらされており、病状も悪化の一途をたどり、すでに余命の幾ばくもないことを自覚していた。（注17参照）
- (15) 抗日戦争中に作られた民謡『東方紅』は“東方紅太陽昇、中国出了個毛澤東”（東の空赤く太陽昇り、毛沢東中国に出でたり）で始まる。文革中“紅太陽”（赤い太陽）は毛沢東を象徴し、旭日東昇をバックにした毛沢東頭部はバッジのデザインとして多用された。
- (16) この年には十年（1966－1976）に及ぶ文化大革命の不毛性、悲劇性を象徴する「林彪事件」が起きた。林彪（1907－1971）は当時、党副主席、国防部長であり、毛沢東の最も親密な戦友であり、後継者であると党規約（一九六九年四月十四日）にも明記されていたが、軍事クーデターを画策して失敗、一九七一年九月十三日未明、空路旧ソ連に向け逃亡中、搭乗機が旧モンゴル人民共和国ウンデルハンに墜落し、死亡したと報じられた。林彪「自滅」の原因は私欲以外のなにものでもないが、中ソ全面戦争の可能性の高まる中、「対米接近」という外交戦略をめぐる、毛沢東、周恩来と対立し敗れた結果であるとする分析もある。もしそれが当たっているなら、文革にも少しは救いがあると言えようが、その「対立」がまた私欲から出たものであり、国際情勢の正確な把握から出たものではないという見方をだれが否定できよう。また、外交上の見解の相違と軍事クーデターの間に如何なる橋を架けようと言うのか。

林彪事件の二ヶ月前、隠密裡にキッシンジャーを北京に迎えた周恩来をロベール・ギランは次のように書いている。

「キッシンジャーが隠密裡に北京に来ていた！毛がニクソンを迎える！うそのような豹変。米国の政治全体のバランスが一変。中国では、内政の波乱はにわかに外交政策の二の次となるが、それは約十五年来、はじめてのことだ。対外政策、それは周恩来を指す。できるだけ早く、会わなくては。

まもなく彼は我々の前に立っている。彼が一同を人民大会堂に招待してくれたのだ。純血種の面立ち、高貴な額、黒々とした髪と眉。七十歳を出ているのにまだ若々しいものごしだ。よく動き、さまざまに表情を変えるまなざし。それは微笑から攻撃へと、苦もなく変わる。どことなく大きな野獣のいこいのひととき、力を内に抑えている豹の静かな姿を思わせるものがある。その双肩に二十年以上も、五億を超える国民の政府を荷なっている人が、ここにいる。ニクソン招待を率先して進めたのは毛沢東だといわれている。多分そうだろう。しかしその変化にはあきらかに周恩来という銘もはいており、彼の天才的な外交の手腕が著しい。米軍のベトナム撤兵の機が熟していること、ニクソンに大きく譲歩する構えがあることを、周恩来は見抜いていた。」（『アジア特電1937～1985 過激なる極東』、矢島翠訳、平凡社、1988）

- (17) 「彼の仇敵たち」とは文革の動乱の中でのし上がった江青、張春橋、姚文元、王洪文の四人を中心とする一派（「四人組」或いは「宮廷派」）を指し、「孔家の次男」とは孔子のことである。当時、「四人組」はマスメディアを総動員して「批林批孔運動」（「林彪、孔子批判運動」）や「批水滸」（「水滸伝批判」）を展開していた。目的は「党内大儒」、「投降派」（周恩来）を打倒し、国务院の実権を握ることであった。「腕は負傷したことがあり、毎日胸の前に吊るしていた」とは、一九三九年延安で落馬し骨折した周恩来の右腕を言っている。
- (18) 李先念の可能性もあるが、軍の重鎮葉剣英元帥（1897—1986）である可能性も高い。葉剣英は文革勃発後、軍の反文革派の中心人物であり、後の「四人組」逮捕（七六年十月四日）の実質的指導者である。華国鋒政権誕生後は、李先念等と共に華国鋒を裏から動かした。娘婿の劉詩昆（有名なピアニスト）は文革中迫害を受けている。
- (19) 小説原文は「鯤鵬展翅、九萬里、翻動扶搖羊角。嚇倒蓬間雀。土豆燒熟了、還有牛肉。不須放屁、試看天地翻覆。」であるが、これは毛沢東の詞『念奴嬌・鳥兒問答』の一部を取ったものである。ただし「土豆燒熟了、還有牛肉。」の部分は、原詞では「還有喫的、土豆燒熟了、再加牛肉。」（「食い物もある、ジャガイモが煮えたら、次に牛肉を加えよう」）となっている。「鯤鵬展翅、九萬里、翻動扶搖羊角。嚇倒蓬間雀。」は『莊子・逍遙篇』に見られる故事を下敷きにしている。「鯤鵬」は「鯤が化した鵬」の意味である（「北冥に魚有り、其の名を鯤と為す、鯤の大きさ、其の幾千里なるかを知らざるなり、化して鳥となる、其の名を鵬と為す」）。一度の羽ばたきで九万里を飛翔する「鯤鵬」は毛沢東の「革命」中国であり、「鯤鵬」のたいなる飛翔もおのれの惨めな跳躍も飛ぶことに変わりはあるまいと冷やかす「蓬間雀」は、フルシチョフの「修正主義」ソ連を皮肉ったものと解釈されている。この詞は「一九六五年秋作」となっているが、一九七六年元旦『水調歌頭・重上井岡山』（一九六五年五月作）と一緒に発表された。四人組派は毛沢東の詞を借り、「フルシチョフ（修正主義者）→劉少奇（中国のフルシチョフ）→鄧小平→周恩来」という連環で周恩来批判を行おうとしているのである。

鄧小平（1904—）は文革勃発時、党中央総書記の地位にあったが、劉少奇と共に批判され失脚した。「林彪事件」の後に返り咲き、七五年一月には党第一副主席、国务院第一副総理、軍総参謀長を兼ね完全復活を果たしたが、この人事は「四人組」の利害と真っ向から衝突したため、「四人組」はすぐさま反撃に転じ、鄧小平の追い落としに成功した（七六年四月七日、中共中央は鄧小平の党内外の一切の職務を解き、華国鋒を党第一副主席、国务院総理に任じると発表）。鄧小平の復活に周恩来の強い後押しがあったことは言うまでもなく、鄧小平批判はそのまま周恩来批判につながる。

- (20) 髭を蓄えた周恩来の写真で有名なものに、飛行服姿と馬上の雄姿があるが、前者は西安事変（一九三六年十二月十二日）の処理を終え、延安の飛行場に降り立ったとき撮ったもので、後者は抗日戦の行軍途中で撮ったものである（一九三六年撮影）。「あっさり思いっきり白く、雪を頂く感じ」の白髪は、文革初期に国家主席の地位で失脚し、非業の最後を遂げた劉少奇（1898—1969）の晩年がそうであった。

- (21) 青年時代の周恩来は細面の美青年であった。身長は百七十センチぐらいであろうか。「南開（大学）時代に新劇『一元銭』を演じたさい、周恩来が舞台装置をつくり、女形を演じたことはよく知られている」（矢吹晋『毛沢東と周恩来』）
- (22) 円明園、北京西北の郊外にあった清朝の離宮。一八六〇年英仏連合軍の北京占領に際して破壊され、廃墟と化したまま現存する。（『広辞苑』）
- (23) 陶淵明の故事“我豈能爲五斗米折腰向鄉里小兒”（五斗の米のために腰を折って田舎の小僧にへつらったりできようか。蕭統『陶淵明傳』）をふまえた言葉である。
- (24) 茅台酒、コーリャン・とうもろこしを主材料にして製した蒸留酒で、特に長期保存したもの。七〇度以上のものもある。（『広辞苑』）
- (25) 「遼義は貴州省において貴陽につぐ重要な都市であって、高く厚い城壁をめぐらした、典型的な中国の城郭都市の姿を備えている」（武田泰淳、竹内実『毛沢東その詩と人生』）

所謂「遼義会議」は一九三五年の一月六日から八日まで開かれた。共産党軍は国民党軍の数次にわたる包囲討伐を受け、逃避行（江西省瑞金より陝西省吳起鎮まで）の途上にあった。この逃避行は後に「長征」と称されることになる。遼義会議を誰が主催したかについては史家の中にも異説がある。このとき毛沢東は党中央の主流からはずれていた。

「赤軍は一九三五年一月四日の夜から朝にかけて遼義を占領、翌日には毛沢東・朱徳たちの中央軍事委員会縦隊が入城し、市民の大歓迎をうけている。そして、八日には政治局拡大会議がひらかれ、『中共中央の敵の第五回“包囲討伐”に反対した総括に関する決議』が採択され、毛沢東の指導が確立した。この会議において朱徳、劉少奇、中央軍事委員会の同志たちが毛沢東を支持したといわれる」（武田泰淳、竹内実『毛沢東その詩と人生』）

「当時、周恩来の党および紅軍における地位は、顧問ブラウンをのぞけば、博古、張聞天につぐナンバースリーであり、声望からいえば両者に並んでいた。こうした地位からして、周恩来が事実上、会議の進行をつとめることになった。周恩来はみずから切りもりした会議で博古の戦術の誤りを批判し、みずからがこれに追随したことを自己批判し、毛沢東を指導部の一員に引きあげたのであった」（矢吹晋『毛沢東と周恩来』）

ブラウン（Otto Braun, ?-1974）はコミンテルンから派遣されたドイツ人軍事顧問で、中国名「李徳」、筆名は「華夫」。博古（秦邦憲）と張聞天とともに王明（注30参照）と同じくソビエト留学生で、左翼教条主義グループを形成し、一九三一年から遼義会議までの四年間、党中央の実権を握っていた。

遼義会議の結果、毛沢東は周恩来に換わって中央軍事委員会主席となり、同時に政治局常務委員となった。このときより後、毛と周の地位が逆転することも、また職務が重なることも二度となかった。

- (26) 「舵手」、「導師」（他に「領袖」、「統帥」）等は文革中毛沢東に奉られた賛辞である。「偉大的」（偉大な）を冠して、「偉大的領袖、偉大的統帥、偉大的導師、偉大的舵手毛主席萬歳！萬萬歳！」のように使われた。
- (27) 「天下に人材輩出」の原文は「江山代有人才出」であるが、これは清・趙翼の「李杜詩篇萬口傳、至今已覺不新鮮。江山代有人才出、各領風騷數百年。」（「李白、杜甫の詩篇は多くの人が口ぐちに伝え、今ではもう新鮮さを感じなくなった。天下にはどの時代にも才人が現れ、各々數百年、詩文の先頭に立つのである」）をもじったものである。
 「人民は今この時より立ち上がった」は建国記念式典における毛沢東の宣言の中の言葉である。一九四九年「十月一日午後二時、中央人民政府委員会が北京でその職に就き、第一回会議をひらいて、中華人民共和國中央人民政府の成立を宣言し、三時から、三十万の市民が天安門広場に集まって中央人民政府成立の式典がおこなわれた。毛沢東が中央政府成立の宣言をよみあげ、新しい国旗を掲揚した」（武田泰淳、竹内実『毛沢東その詩と人生』）
- (28) 「ソ連の禿野郎」とはフルシチョフのことである。毛沢東はフルシチョフの政策を修正主義とみて毛嫌いだ。六十年代の中国人は、自国ではスターリン批判を行い、中国からは専門家・技術者を引き揚げさせたフルシチョフを「裏切り者」の典型と感じていた。文革の中で国家主席劉少奇に浴びせられた「中国の

フルシチョフ」という悪罵は、路線闘争を越えて、感情的嫌悪感を含んでいたと考えてよい。

- (29) 一九二七年三月二十一日、「北伐軍が上海郊外に進出したのに呼応し、80万人の労働者が総罷工（ゼネスト）。周恩来（中略）らが指導」「22日、市民大会を開催し、臨時革命委員会委員31名、市政府委員19名を選出して、上海臨時特別政府を成立さす」「帝国主義列強と上海の財閥（江浙財閥）と政客ら国内反動勢力の期待を一身に集めていた蒋介石は、27年4月12日早朝、青幫・紅幫を駆使して上海民衆の革命政府と総工会に対する大弾圧を開始した。（上海クーデター又は四・一二クーデター）」（池田誠等『図説中国近現代史』、法律文化社、1988）

- (30) 王明（陳紹禹、1907—1974）、「王明は『王明路線』という名を中共党史に残している。一九三一年一月、留学していたモスクワの中山大学から帰国したかれは、党の指導権にぎり、都市を中心に革命を推進することを指示した。これは当時、農村でゲリラ活動をおこなっていた毛沢東と対立するもので、王明は極力、毛沢東を排斥した。

かれはまた一九三一年十一月からモスクワにあって、コミンテルン駐在の中国代表として、国際的にも知られていた。抗日戦争の勃発をみて帰国、一九三七年十一月以降、延安にあった。コミンテルンの権威をかさに、かれは毛沢東と理論的に対立した」（竹内実『毛沢東』）

「1931年1月7日、6期4中全会が上海で秘密裏に開かれ、王明らソ連留学派が中共中央の指導権を掌握、以後4年間党内を支配。周恩来は政治局常務委員、毛沢東は政治局委員候補」（矢吹晋『毛沢東と周恩来』）

張国燾（1898—1979）、中国共産党創立者の一人。党組織部長・駐ソ代表。一九三四年の長征に反対して毛沢東と対立、三八年除名される。後に香港に亡命。「もともと張国燾は（1935年6月毛沢東らの）第一方面軍と合流する前に、西北連邦政府なるものを成立させていた。西北というのは西康、青海、甘肅、新疆諸省の地域を指しているが、ここに根拠地を設けよう、そのためには北進より南下すべきであるというのが彼の意見であった。当然、そのころ民族的危機として感じられていた日本帝国主義との対決ということはできなくなる。張国燾にとっては、それらの地域がソ連に近いことに、安心感や正統性を見出していたのかも知れない。また新疆省の特殊な地位を利用して、一種の独立国を樹立できる可能性を夢みていたのかも知れない」（武田泰淳、竹内実著『毛沢東その詩と人生』）

- (31) 張穎〈走在西花庁熟悉的小路上〉によれば、周恩来夫人鄧穎超は蒋介石の起こした「四・一二クーデター」からの逃亡避難の中で死産をし、以後子供を生めなくなったという。死産した時と場所には異説がある。注29参照。

主要参考文献

- 臧克家等著『毛沢東詩詞研究』（臧克家、郭沫若、周振甫による解注、香港海賊版）
 武田泰淳、竹内実著『毛沢東 その詩と人生』（文芸春秋社、1965）
 高文謙著〈在最後の日裏〉（人民日報1986年1月4日掲載）
 高文謙著〈艱難而光輝的最後歲月〉（人民日報1986年1月5日掲載）
 張 穎著〈走在西花庁熟悉的小路上〉（『中国作家』、1986年第6期掲載）
 ディック・ウィルソン著『周恩来』（時事通信社、1987、田中恭子・立花丈平訳）
 寒山碧著『鄧小平伝』（中公新書、1988、伊藤潔訳）
 竹内実著『毛沢東』（岩波新書86、1989）
 矢吹晋著『文化大革命』（講談社現代新書、1989）
 矢吹晋著『毛沢東と周恩来』（講談社現代新書、1991）

(1992. 9. 10 受理)